

残したいまち 守りたい風景

東部山麓住宅地 景観ガイドライン



令和4年3月発行
発行元：神戸市都市局景観政策課
TEL.078-595-6727 FAX.078-595-6805
神戸市広報印刷物登録 令和3年度第650号(広報印刷物規格A-1)

リサイクル適性(B)
この印刷物は、版紙へ
リサイクルできます。


United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

City of Design
KOBE 

Member of the UNESCO
Creative Cities Network
since 2008

KOBE 
UNESCO City of Design

山と海に見守られた、坂のまちで

山の自然にとけこむ家々。石や緑に彩られた道を行く人々。
振り返れば、美しい神戸の空と海が広がっています。

東灘区から中央区に広がる神戸市の東部山麓住宅地は
明治後期から長い歴史のなかで、風格のある住宅地景観を形成してきました。
上質な住宅や外構のしつらえの集積は現在に受け継がれ、
神戸を代表する住宅地としてのステータスを維持しています。

しかし、近年では相続などをきっかけに土地や建物が処分され、
良好なまちなみが失われてしまうケースも増えています。

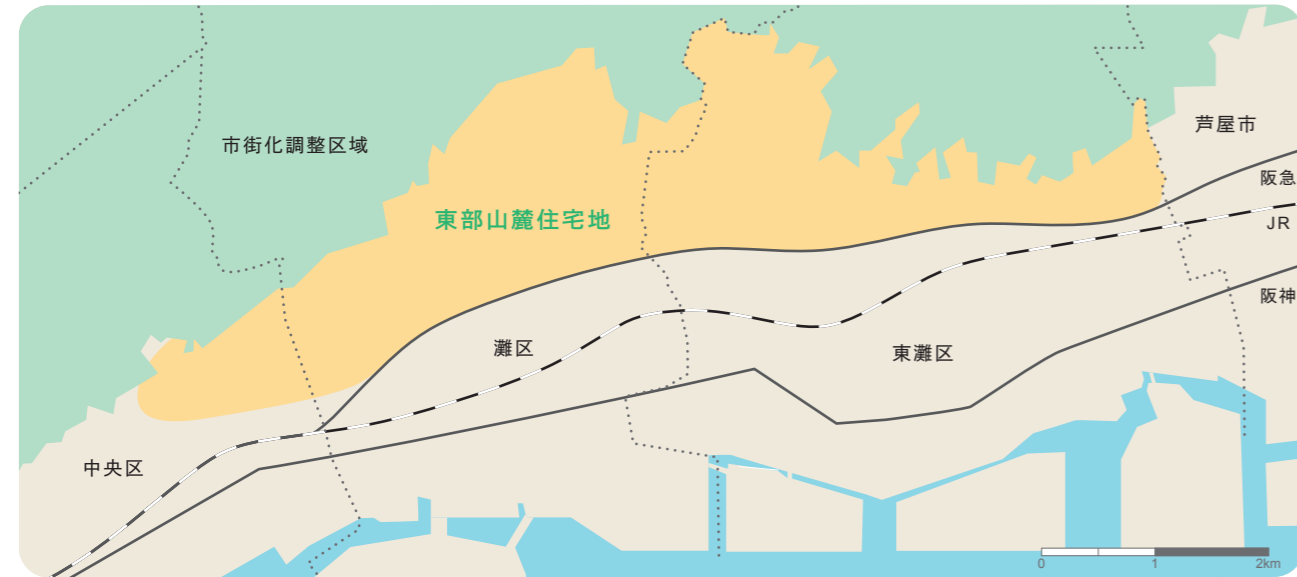
本ガイドラインでは、建築などを行う際に配慮いただきたい事項をまとめました。
東部山麓住宅地が、今後とも魅力あるまちであり続けるためにも
共有財産であるまちなみの美しさを、次の世代へと引き継いでいきましょう。



東部山麓住宅地について

対象エリア

西は中央区の新神戸駅周辺から東は東灘区の市境までに連担し、概ね阪急神戸線以北の斜面地に位置する住宅地を、本ガイドラインの対象とします。

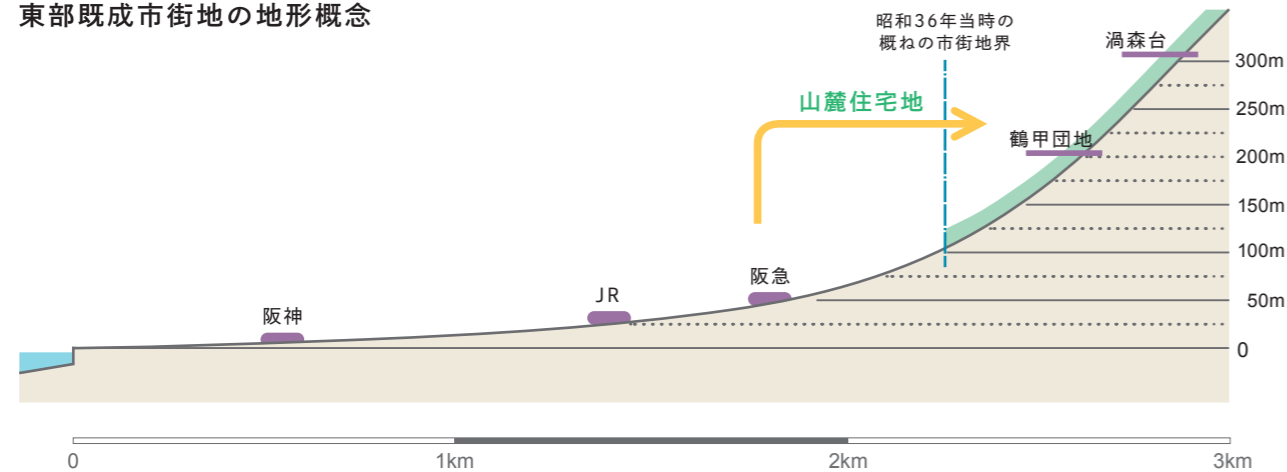


地形

六甲山と神戸港にはさまれた東部既成市街地では、阪急神戸線（標高30～60mほど）・JR（標高20mほど）・阪神本線（標高10mほど）の鉄道3路線が敷設されている、山の南斜面の麓あたりを境に傾斜が変わります。海に面する阪神以南の地域はほぼ平坦ですが、北に向かうと勾配が増し、阪急以北の山麓部では5～10%ほどの勾配で、なかには20%を超える場所もあります。

この市街地は明治期以降に住宅地として発展し、昭和戦前期までは標高100m程度以下の地域での開発が為されてきました。戦後の高度経済成長期においては、山林が住宅団地などに造成され、標高300mほどの渦森台、200mほどの鶴甲団地など、より高い場所での開発が進められ、現在の住宅地の一面を形成しています。また、南北に流れる河川が小規模な谷筋をいくつも形づくっており、このことが山麓住宅地の景観を変化に富むものになっています。

東部既成市街地の地形概念



市街地の形成過程

東部山麓住宅地は、大阪側からの市街化圧を受けた現・東灘区あたり（東部エリア）と、神戸側からの市街化圧を受けた現・灘区や中央区東部あたり（西部エリア）で、その形成過程において若干様相が異なります。明治以降に形成されてきたこの地域の性格を時代別に大きく分類すると、以下の3つに分けられます。

① 明治～昭和戦前期：住宅地形成の始まり

西部エリアが日露戦争後の神戸の市街地拡大の受け皿として開拓されていった一方で、東部エリアは大阪の郊外住宅地として発展していきます。きっかけは、明治30年代中頃から大阪市内の居住環境が悪化し、富裕層の郊外転出の傾向が生まれたこと。その流れのなか、大阪の富商らが、眺望のよい現・東灘区の花見台で規模の大きい、邸宅を建て始めます。大正9年には、現・阪急電鉄の岡本・御影・六甲・上筒井の駅が設けられ、中間サラリーマン層の転居も促すことになりました。

② 第二次世界大戦以降：山麓部の市街地化

戦時の空襲によって、神戸市の市街地全域が大きな被害を受けましたが、現・東灘区や灘区東部の山麓部は被災を免れました。戦後になると、既成市街地の広い範囲で戦災復興区画整理事業が施行され、昭和30年代には、山麓部も含み市街地化が進みましたが、戦災から逃れた地区では明治・大正・昭和前期に培われた地域の特質が色濃く残っています。

③ 高度経済成長期：計画的な団地の開発

臨海部での埋め立て事業が進む一方で、山麓部では昭和33年に鴨子ヶ原団地（15.8ha）が開発されたことを皮切りに、山林が住宅団地などに造成され、昭和50年代には現在に近い市街地規模となりました。



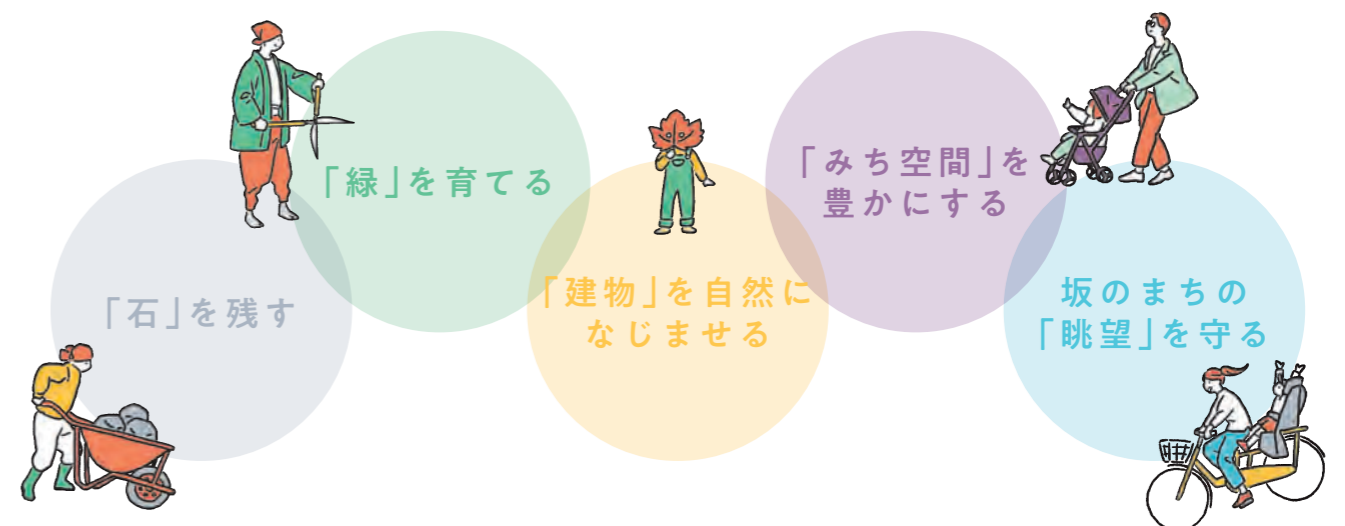
昭和45年 渦森台周辺



昭和47年 神戸大学・鶴甲団地周辺

景観形成のキーワード

東部山麓住宅地の景観形成に向けて、まちの資源を守り、育てるという視点から5つのキーワードを設定しました。項目ごとに、建築行為等における留意点を提案します。





建築の
ポイント

引き継がれてきた石垣・石塀を残す

石垣や石塀は、伝統的なまち並みを形成する要素のひとつです。石積みを保全することは、風格あるまちの景観を保つことにつながります。

- ① 既存の石垣や石塀を残し、補う
- ② 擁壁・塀を新設する際は、自然素材を活用する
- ③ 既存の石積みや植栽に合う、意匠・構造・色彩を意識する



① 既存の石垣や石塀を残し、補う

既存の石垣はできるだけ保全するとともに、コンクリートの擁壁でも石張りにすることで、まち並みの連続性が保てます。また、厚みのある石を用いることで、よりまちの品格を高めることができます。



② 擁壁・塀を新設する際は、自然素材を活用する

擁壁や塀を新たに設けるときは、石・土・木・レンガなど、まちの風景とけこむ自然素材を用いるようにし、自然素材を模した無機質な素材は使用を控えましょう。

③ 既存の石積みや植栽に合う、意匠・構造・色彩を意識する

素材だけではなく、石積みや植え込みなど伝統的なしつらえを阻害しないデザインも重要です。金属塀を使用する場合は、小規模に留めましょう。



石を残す



神戸市東部の山麓住宅地は古くから花崗岩の産地で、岩の別名「御影石」の語源となった地です。屋敷まわりの塀など、随所で石材を活用することでまち並みの基礎が育まれてきました。今でも地区の景観を特色づける大きな要素となっています。

景観向上のためのプラスワンポイント

コンクリートの擁壁に石張り等で化粧を施す際は、同じパターンの繰り返しにせず変化をつけるようにしましょう。また、ブロック塀やアルミフェンス、ネットフェンスなどの使用はできるだけ避け、石垣のよさを損なわないようにしましょう。



× 石張りが同じパターンで不自然



× 無機質な素材は石垣に合わない



大正期以降に進められた、東部山麓住宅地の開発。山林や農地が広がるのどかな環境にとけこむように住まいが建てられ、周辺の自然と連なるように生け垣や庭木が整えられました。その品のある緑のしつらえは、今も引き継がれています。

生垣を設けて、庭木を増やす

建築の
ポイント

古くから用いられている景観要素として、生垣が挙げられます。生垣や庭木などの植栽は緑豊かなまち並みを形作り、季節の移ろいととも道行く人々の目を楽しませます。

- ① 既存の生け垣・庭木を残す
- ② 道路沿いに植樹スペースを確保する
- ③ 植栽の手入れがしやすい構造にする



① 既存の生け垣・庭木を残す

戸建住宅では、元からある庭木を極力残し、道路沿いの植栽スペースを確保しましょう。また、山手の自然とまちが一体となるように、小規模でも生垣を設けましょう。沿道に植物を育てる住まいが連なれば、緑が映える道の景観が生まれます。



② 道路沿いに植樹スペースを確保する

共同住宅では、沿道空間に植栽を施すことで自然豊かな環境を目指します。建物を道路から後退させ、緑化スペースを十分に確保することが望まれます。

③ 植栽の手入れがしやすい構造にする

定期的手入れされた生け垣は、まちに彩りを与えます。イヌマキのような常緑樹は生長が緩やかで虫がつきにくく、葉が密に茂るため、生け垣に適しています。

景観向上のためのプラスワンポイント

まちの緑を育てるために庭木を増やすことは大切です。一方で適切な手入れを行うことで、整った景観を保つことも重要です。また、共同住宅においては緑化できる沿道空間を有効に活用し、緑多い地域環境づくりに取り組みましょう。



× 庭の緑が道路にあふれ出している



× 岩や砂を使う枯山水は緑が乏しい



建築の
ポイント

風土と伝統を尊重し、調和を図る

自然環境を活かした住宅群は、地域の大きな特色です。背景となる山並みになじむ素材を用いるなど、風土と伝統を尊重し、建物と自然の調和を目指します。

- ① 建物のボリューム感を抑えて、地形に沿わせる
- ② 窓などの開口部が少ない壁面を、外に見せない
- ③ 自然やまちになじむ、素材・テクスチャー・色彩を用いる



① 建物のボリューム感を抑えて、地形に沿わせる

戸建住宅において、建物を大きく見せずに風景にゆとりを持たせるうえで、傾斜屋根は有効です。共同住宅の場合、斜めに並べる雁行配置にすることで壁の圧迫感が減り、間に生まれる空道を緑化できます。



② 窓などの開口部が少ない壁面を、外に見せない

外に見せる壁面に窓や玄関を設ければ、視覚的に大きな壁にはなりません。大規模な共同住宅であっても、分節化や凹凸のある立面形状を採用すれば、建物に有機的なリズム感が生まれます。

③ 自然やまちになじむ、素材・テクスチャー・色彩を用いる

住まいには、自然と調和する素材（木・石・土・瓦・スレートなど）、材質、意匠、色彩を選ぶようにし、光沢のあるタイルや金属、コンクリート打放し擁壁はできるだけ避けましょう。

建物を自然になじませる

東部山麓地域の住宅は、明治～昭和期の戦前にかけてさまざまな様式で建てられてきました。その多くは斜面地を活かし、地域特有の自然環境を阻害することなく建てられており、中には著名な建築家による優れた歴史的建築物も残されています。

景観向上のためのプラスワンポイント

コートハウスなどの開口部が少ない住宅は自然なまち並みを断絶するため、閉鎖的な壁面は外に見せないようにしましょう。また、多色使いのデザインは避けて、山麓住宅地の景観にとけこむように設計することが大切です。



× 擁壁のようなコンクリート打放し



× 色使いがカラフルすぎる



建築のポイント

ゆとりある、みち空間の特質を維持する

特徴ある地形と、石垣・緑・住宅など景観を形づくる要素が互いに作用して、ゆとりある道路空間が生まれます。歩行者が心豊かに歩ける沿道の景色を育みます。

- ① 建物を道路から後退させ、敷地の空間をデザインする
- ② 駐車スペースを目立たせない
- ③ 擁壁のボリューム感を抑える



① 建物を道路から後退させ、敷地の空間をデザインする

建築物を道路からセットバックすれば、緑化空間を確保できます。石垣や庭木越しに見える家並みは、地区特性の基本です。共同住宅においては、直に道路に接することを避け、沿道に緑を増やすことが大切です。



② 駐車スペースを目立たせない

駐車場の出入り口を絞り、極力目立たない位置に設けましょう。また、石垣を用いることなどで、駐車場の無機質な印象を減らすことができます。

③ 擁壁のボリューム感を抑える

共同住宅を囲う擁壁は、歩行者になるべく圧迫感を与えないように緑で覆うなど、視線を和らげる工夫をしましょう。

みち空間を豊かにする



山すそに広がるまちを歩くと、石垣や生け垣、庭木越しに住まいが垣間見えます。そして、南北に走る道路から眺められるのは、美しい神戸の山と海。路地は狭くとも、道行く人々の心を和ませる「みち空間」はこのまちの資産といえます。

景観向上のためのプラスワンポイント

露出駐車の場合は道路との平行駐車を避けて、車の可視面積を減らすように工夫します。駐車がないときは、接道空間としての修景を図りましょう。また、ヒューマンスケールを超える擁壁は沿道景観を損なうため、歩行者の身長ほどに高さを留めましょう。



×車が目立ちすぎている



×長大な擁壁は圧迫感を与える



坂のまちの 眺望を守る



傾斜地に形成された山麓市街地では、海や山への眺望が開けています。南北に走る谷筋を小河川が刻み、東西に渡る街路は起伏に富んでいます。道路の先に海や市街地を一望できる眺望景観は、とりわけ大きなまちの資源です。

眺望に配慮しつつ、山の緑になじませる

建築の
ポイント

周りを見通せるように景観を守るだけでなく、坂の傾斜を感じるしつらえを外構に施すなど、まちの風景の一部として自宅が見られるという意識が大切です。

- ① 道の傾斜に沿わせた建物・外構のデザインにする
- ② 上からの眺望を意識した形態・意匠にする
- ③ アイストップでは、見られる方向と正面性を意識する



①道の傾斜に沿わせた建物・外構のデザインにする

見通しのよい坂道では、隣接敷地の外構との調和や連続性に配慮することで、統一感のある美しいまちなみ景観が生まれます。道行く人に道路の勾配を感じさせるように建物や外構を設計するなど、地形を積極的に取り入れたデザインにしましょう。



②上からの眺望を意識した形態・意匠にする

上から見下ろした眺望に配慮した、屋根の形態や色彩としましょう。建物の視覚的なボリュームを減らし、背景となる山の緑になじませるために、傾斜屋根は有効です。

③アイストップでは、見られる方向と正面性を意識する

歩行者の目が留まりやすい場所（アイストップ）では、建物の形態や配置を工夫したり、シンボルツリーを設けるなど、道行く人の視線を受け止める工夫をしましょう。

景観向上のためのプラスワンポイント

傾斜屋根を使って、建物を山の緑になじませましょう。フラット屋根にする場合は、屋上の建築設備をルーパー等で目隠しして、上からの眺望を意識することが望めます。アイストップでは建物の正面性に留意し、景観に合った外構のしつらえを見せましょう。



× 屋根上の機器類が眺望を阻害している



× 視線の先にまちなみに合わないしつらえ



① 緑にあふれた石垣と竹垣の小径



② 地形を活かした立体的な緑化



③ 石垣・石塀を残す伝統的なまちなみ



④ 山麓を潤す表六甲河川の流れ



⑤ 市街地を見下ろす眺望



⑥ 大きな石垣がつづく坂道

石や緑などの景観資源が多くみられるエリア

石積みについて

東部山麓住宅地において、とりわけ大きな景観要素が「石積み」です。まちの共有財産を守り、次の世代へと引き継いでいきましょう。

石の形態

■ 野面石(のづらいし)

自然のままの形で、整形または加工していない石。石肌の風合いを生かし、平らな面を表面にそろえて積む。



■ 玉石(たまいし)

20~30cmほどの丸型の自然石。見た目をよくするために、大きさが近い石を並べて使うことが多い。



■ 間知石(けんちいし)

角錐型に加工された方形の石材。1つの石の荷重が6つの石に分散して安定するため、土留め(どどめ)に適している。



■ 切石(きりいし)

直方体に加工された石材。積むと目地が直線的に形成され、一般的にはモルタルやコンクリートで固めた深目地にする。



石の積み方

■ 布積み

角段の高さをそろえて積み、横目地が水平に一直線となるように積む。



■ 乱積み

横目地がとおらないように、大小様々な石を組み合わせる。



■ 谷積み

石の組み合わせにより、一定の谷ができるように石を斜めに積む。



■ 崩れ積み

大ぶりの自然石が用いられ、崩れたような雰囲気を出しつつ、自然な形に積む。



神戸らしい石積みには、整形・加工されていない錆色の御影石が使われています。谷積みか乱積みが用いられ、石の大きさが整っている場合は谷積みで石を積み上げます。

